

## 第3回「ふくまる夢たまごセミナー」

日 時 9月17日（金）18：00～19：30

内 容 「答えのでない体育の話」

講師 越智 裕（教育政策課）

「教育は今日行くという話」

講師 前川 亮太（教育政策課）

※オンラインで実施

緊急事態宣言のため、今回もオンラインによるセミナーになりました。教育政策課のお二人の指導主事から、授業づくりのための基本や教師としての心構えについてお話いただきました。塾生との意見交換を交えながら、終始和やかな雰囲気セミナーとなりました。

### I 「答えのでない体育の話」

越智指導主事の「よい体育の授業とはどのような授業を想像しますか？」との問いかけからスタートしました。

- 体を動かす楽しさを知ることができる授業
- 全員がモチベーションを持って行うことができる授業
- 体を動かすことの楽しさを感じ日常生活の中で運動習慣に繋がる授業
- 子どもたちが成功体験を積むことができるような授業
- 苦手な子にとって、いかにモチベーションを持たせるかに重点を置いた授業

等々、塾生たちの反応は予想に反して的を射た回答が多く、意識の高さを感じました。

そこで、「皆さんがそのように考える根拠は何ですか？」と本セミナーの核心に迫る問いかけがなされます。越智指導主事は、「感覚として、いい授業はこういうのだというイメージや理想を持つことはすごく大切で、そこに一定の根拠があると説得力が出てきます。」と講義が進んでいきました。

「スポーツの語源は、ラテン語で“気晴らし”という意味があり、仕事とは別のこと、すなわち余暇活動です。スポーツを余暇活動や遊びと考えていくと主体的で能動的なのが大前提です。学習指導要領〈体育〉の目標を要約すると、①健康の保持増進②豊かなスポーツライフの実現であり、そのために必要な力を学

校で身につけましようとして書いてあります。「良い体育の授業とは？」の問いかけに、当初、皆さんからは『全員が跳び箱を跳ぶことができる』とか『運動能力が上がる』などの意見がたくさん出てくると思っていました。自主性とか意欲に関することが出てきていました。子どもたちの運動意欲を高めようとする授業には、しっかりとした裏付けがあります。このことは他の教科にも言えることです。」

良い授業の成立のためには、イメージや感覚で考えるのではなく、学習指導要領をはじめとした深い教材研究に基づいた根拠を持つことが大切であるという講義でした。

※時間の関係で短くしましたが、学習評価の関係する続きがあるそうです。

## II 「教育は今日行くという話」

「አዲስ ኮሮናቫይረስ これについて思いついたことをつぶやいてください。」

- 読めません。私には解読できません。
- 何語かわかりません。
- アラビア文字みたいな・・・。

「越智さんの話では皆さん思考を働かせたけど、これについては何も書けなかったよね。ということは一気に皆さんの思考が落ちたのですか？」

- 思考力は落ちていない。知識がないからだと思います。

「これは、実は新型コロナウイルスって書いています。」

と、一方的に与えられた知識はいざというときには使えない。思考力はとても大切だけれども知識も大切。子どもたちが議論するとき、知識はとても大切になってくると強調されました。

続いて、「 $1 + 1 = ?$ これ分かる人は手を挙げてください。」「本当に2ですか？」前川指導主事独特の揺さぶりです。どの学年を担当しても、算数の時間の最初に出していた問題だそうで、塾生たちも考え始めました。 $1 + 1 = 1$ となる例や“日銀”の正しい意味を紹介し、本当の意味を理解していないと説明が難しいこと、説明を考えることが思考力につながっていくことを分かりやすく解説されました。

前川指導主事は、「自分が知らないということを知ることが大切です。自分がいかに物事を知らないか謙虚にならなければ物事の本質は見えないと思います。ここで、学校の先生は子どもより優れていなければならないという人がいますが、分からないことは分からないでいいと僕は思います。」と、教師は子どもと共に学ぶ、成長するものだまとめられました。

後半は、教師として心がけるべきことを以下のように話されました。

○子どもを見る目を養う。

どんな子にも絶対に良いところがあります。良いところは努力しないと見えてきません。また、そこには鮮度があります。子どもが「褒めてほしいな」って顔をしている瞬間を逃さない目が大切です。

○怒ると叱るは違います。

怒るは感情、叱るは論理的だと思っています。行為を叱るのであって人格を叱ってはいけません。すぐに叱る。責任を持って叱る。短く叱る。

○叱るより褒めるほうが難しい。

本当のことだけを褒める。機嫌を取るために褒めても無駄です。子どもはすぐに見抜きます。子どもには褒められて伸びる一瞬があります。それは、自分の頑張りを認めてもらった時。そのために子どもの一挙手一投足を見逃さない目、これが大切です。

○最後はユーモア。

これは間違いなく大切です。学級経営、子どもとの関わりで欠かせないものです。教師として必須のセンスですね。ユーモアの分かる子どもを育てることが大事なのです。

最後にご自身の好きな言葉を紹介されました。

≪平凡な教師は言っていて聞かせる。良い教師は説明する。優秀な教師はやって見せる。しかし、最高の教師は子どもの心に火をつける。≫

## 【塾生の感想より】

○今回のセミナーの前半では、良い体育の授業について考えました。私は普段、幼児教育について学んでいるので、これまで体育の授業について学ぶ機会はありませんでした。でも、幼児教育と同じように考え、子どもの気持ちに寄り添い意欲を育む授業を考えました。根拠はなく感覚で考えましたが、結果的には間違っていないと知ることができました。これからは、しっかりと根拠をもって説明できるようになりたいと思います。後半では、真に理解できていなければ説明することはできないということを知りました。まずは、自分がいかに物事を知らないかということを知覚し、謙虚にならなければならないと気付きました。

○褒めることについては、「過程」と「鮮度」についてのお話が特に印象に残っています。現場実習に行っている学校でも褒めることを意識的に行うようにしていますが、今思い起こすと「結果」を褒める場面が多かったように思います。

「計算問題が全部解けたから」「文字がきれいに書けたから」など、見てわかりやすい部分ばかりでした。もちろんそこを褒めることも大切なのだと思いますが、真剣に問題に取り組む姿や姿勢といった「過程」を伝えることで、児童にとっても「この姿勢が良かったのか」「ゆっくり丁寧に書けばいいのか」というように具体的な行動を知ることができるのではないかと思います。

○一見簡単に見える問いでも、「ほんまに？」や「説明してみて」の一言でこんなにも頭を動かす時間を作れるということを体験できました。ちょうど今週の現場実習でも似た場面に出会いました。3年生の算数の授業で「1000を23集めるといくつになるか？」の問いに、子どもたちは「23000」と簡単に答えを出していましたが、先生の「なんでそうなるん？ほんまにそうなる？説明してみて」という問いかけによって、サラッと終わると思っていた問題が、結局その1問だけで1時間が終わるものになりました。子どもたちは説明していきませんが、中には納得していない子もいたため、いろんな説明を考えたり、前に出て黒板に表を書いて説明したりして思考し続けていました。授業後、担任の先生に話を聞くと、今回のセミナーと似たような意図があったと話していました。私も、「ほんまに？」や「説明してみて」と子どもの心を揺さぶり、一緒に思考する時間を大切にしたいです。